様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　４日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：２０１０～２０１２
課題番号：２２５２０３２５

研究課題名（和文）　初期ルネサンス期のスペイン語散文における修辞学技法の受容と定着

研究課題名（英文）　Reception and Assimilation of Rhetorical Technique in Early Renaissance Castilian Prose

研究代表者
瀧本　佳容子（TAKIMOTO　KAYOKO）
慶應義塾大学・商学部・准教授
研究者番号：７０３０６８６９

研究成果の概要（和文）：カスティーリャ語（スペイン語）散文は、14 世紀末からのカスティーリャ王国の政治・社会的動揺の中で、人文主義およびイタリア･ルネサンスの影響のもと、従来にも増して発展した。聖職者を主とするラテン語の使い手たちの俗語に対する圧力や詩人たちからの散文に対する侮蔑に抗して、カスティーリャ語散文の書き手たちは自意識や自我を確立し、これらを自らのことばで表現していくようになり、そこでは修辞学技法が重要な役割を果たした。

研究成果の概要（英文）：During the political and social disturbances that took place in the Kingdom of Castile from late fourteenth century and under the influence of Humanism and the Italian Renaissance, Castilian prose underwent greater changes than it had in previous centuries. Writers of prose in Castilian conceived a new identity, which they expressed in the vernacular, challenging the primacy of those who wrote in Latin—mainly Scholastic clergy—and opposing the contempt that Castilian poets showed for the prose. Castilian writers began to express their most profound feelings in their native language, assimilating the rhetorical techniques that were spreading across Europe and that played an important role in the process of establishing Castilian prose as a language of literature.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	600,000	180,000	780,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
２０１２年度	500,000	150,000	650,000
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：外国文学、初期ルネサンス期、スペイン文学

１．研究開始当初の背景

本研究の背景となったのは、1990 年代以降にスペイン中世文学研究が大きく進み、その中で、本研究と関係する初期ルネサンス期のカスティーリャ語（スペイン語）散文研究も進んできたことである。これらは、次のよう

にまとめることができる。
(1) 写本および書誌学的研究の進展。(2)14－15 世紀のカスティーリャ文学における人文主義およびルネサンスの浸透・受容に関する研究の進展。(3) 個々の作家に関する研究の進展、および、校訂版や研究の増加。(4) スペイン中世文学研究の国際化。スペイン以外の国籍を持つ研究者の数が増加して他言語の文学との比較もより活発になり、中世ヨーロッパ文学という広い文脈の中におけるスペイン中世文学の位置づけが見直されている。

２．研究の目的

初期ルネサンス期（15 世紀）のカスティーリャ語（スペイン語）散文における修辞学技法の受容と定着について、15 世紀のカスティーリャ王国における社会文化史およびイタリア･ルネサンスの影響全体の中に位置付けつつ検証する。

古典的修辞学技法を受容した 15 世紀の散文作家を対象とし、中でもフェルナンド･デ･プルガール（Fernando de Pulgar, 1420/30 *ca.*-92*ca.*）に注目する。プルガールが、修辞学技法に親しんで作品に取り入れた過程を検証する。特に、書簡作成術を反映した『書簡集』（*Letras,* 1485*ca.*）、および「演説体」を取り入れた『カトリック両王年代記』（*Crónica de los Reyes Católicos,* 1492*ca.*）を対象とし、両者の相互テクスト性を検証する。

３．研究の方法

(1) カスティーリャ語（スペイン語）を公用語化したアルフォンソ 10 世（在位 1252-84 年）から 14 世紀にかけての代表的カスティーリャ語散文作家による、作者としての自意識の表現の系譜を、韻文作家と比較しつつたどる。
(2) 14 世紀末から 15 世紀末にかけてのカスティーリャ王国における、政治的動揺、社会状況の変化、人文主義やルネサンスの影響という文化的状況と、カスティーリャ語の台頭を関連づける。
(3) 15 世紀のカスティーリャ語作家たちによる、カスティーリャ語称揚および俗語作家たる自我表明の言説を考察する。
(4) カスティーリャ語散文の作家たちに関するプロソポグラフィックな考察を行い、カスティーリャ社会の変化と関連づける。
(5) F. デ・プルガールおよびその作品に関しては、次のような調査と分析を行う。①プルガールの作品の写本と刊本との関連を調査する。②『カトリック両王年代記』の登場人物およびその発話内容を抽出する。③『書簡集』の各書簡と②の結果を照合し、相互テクスト性を検証する。

４．研究成果

本研究では、13 世紀半ばから 15 世紀末にかけて俗語たるカスティーリャ語（スペイン語）の散文が文学的言語としての地位を獲得していく過程、および、カスティーリャ語散文の書き手が作者としての自意識を確立しつつカスティーリャ文学を理論化する過程の考察という文学史的アプローチをマクロ的視点から行った。その際、古代から中世にかけてのラテン語文芸に関する理論（特に、文法、修辞学、詩論）の受容と発展も視野に入れた。

次いで、14 世紀末から 15 世紀末にかけてのカスティーリャ王国における、政治的動揺、社会状況の変化、人文主義やルネサンスの影響という文化的状況と、カスティーリャ語の台頭を関連づけて考察を行った。そして、15 世紀のカスティーリャ語の書き手たちが作者としての自我を表明していく過程を考察

した。

(1) 他の俗語と同様に、カスティーリャ語散文は、主にラテン語文献を典拠とした翻案・翻訳やこれらのアンソロジーという形で書かれ始めた。カスティーリャ語散文が大きく飛躍したのは、アルフォンソ 10 世の時代である。ナショナリズムを背景として公文書に使用され始めたほか、法律・歴史・天文学その他の書物が編纂されることによって、語彙が増大し多くの大部の文献が著された。アルフォンソ 10 世は、近代的な意味での作者でなく編纂者であったが、編纂を命じた書物に自分の名を刻印することによって、テクストに対する権威を示した。

14 世紀になると、ドン・フアン・マヌエル親王（Don Juan Manuel, 1282-1348 年）が、ラテン語ほかの文献を典拠にしつつ、これらに独自の構造を与え独自の内容も盛り込んだ散文作品を著した。ドン・フアン・マヌエルは、単なる編纂者ではなくオリジナル性も備えた作者としての自負を強く表現した。ドン・フアン・マヌエルはまた、自分のテクストへの他者による加筆・修正や写本の散逸を避けるために、自分の作品すべてをある修道院に厳重保管させた。このようにしてドン・フアン・マヌエルは、テクストを物理的に占有する者という意味での権威も示した。

アルフォンソ 10 世やドン・フアン・マヌエルという政治権力の中枢にいる者たちがテクストに対する権威者としてふるまったことは、俗語散文には常に、権力者によって使用されて権威づけられ、存続や発達のためにエクリチュールによってテクストが固定化される必要があったことがわかる。

ドン・フアン・マヌエルとはまったく対照的に、フアン・ルイス（Juan Ruiz, 1284*ca.*-1351*ca.*）は、その韻文作品において、自らの作品への他者による加筆修正を許容し、作品を他者へとわたすようにと促した。しばしば民衆の間で生まれて広まった後にエクリチュールによって固定されるという過程を経る、俗語による口承文芸の成立・流布の原初の様態をメタレベルに凝縮したと言えるフアン・ルイスの言説は、ドン・フアン・マヌエル作品と同時代のものであるだけに一層興味深い。

(2) 14 世紀後半の王朝交代によりカスティーリャ王国では有力貴族の顔ぶれが一変し、彼らは 15 世紀の第 3 四半世紀におよぶまで権力闘争に明け暮れた。これには、有力貴族に抗して王権強化を目指す君主も巻き込まれたが、ここから近代国家の萌芽が生まれた。危機の時代を生き抜き、また、自らの存在証明を確立するために、カスティーリャ語の書き手たちは新しい理想と価値観を追求し、これらを、かつてなかった語彙や表現を用いて俗語であらわすに至った。そして、読み書きが宮廷人に必要な教養だという認識されるようになり、サンティリャーナ侯イニィゴ・ロペス・デ・メンドーサ（1398-1458 年）やフアン 2 世（Juan II, 在位 1406-54 年）などが宮廷文化を発達させた。

(3) 以上のような趨勢のもと、俗語の書き手たちは、自らのことばが古典古代のことばに比肩する価値を持つという自負を表現し始めた。もっとも初期に独自の歴史観をあらわしたのはサンティリャーナ侯である。その詩論『序文 兼 書簡』(1445-49 年）においてサンティリャーナ侯は、カスティーリャ語と古典古代のことばの間の優劣を退けてカスティーリャ語による詩を古典古代以来の詩の伝統の中に位置づけた。同時に、スコラ学に対する配慮を示しつつも、詩を「もっとも高貴で、もっとも価値ある人間の技」と呼び、「韻律こそが散文よりもより完成され権威あるものだと宣言」して、韻文の美的価値を

人類の知の最上位に置いた。

散文蔑視をあからさまに表明したのは詩人エンリケ・デ・ビリェーナ（1384-1434 年）である。ビリェーナは、勅命年代記執筆を担っていた王国書記官たちを「学識を欠き、ラテン語に無知で、修辞や詩の素養を欠く俗語書き」と呼び、書記官たちの書くカスティーリャ語散文を「粗野で無骨」だと決めつけた。

15 世紀末には、人文主義者アントニオ・デ・ネブリハ（1441-1522 年）が『カスティーリャ語文法』（1492 年）においてカスティーリャ語を数々の古典古代の言語と同列にして論じ、カスティーリャ語は「今やその頂点に上りつめ」ているとまで称賛した。この文法書においてネブリハがもっとも重視したのも、音韻論であった。

他方、レオナルド・ブルーニ（1369/70-1444 年）と修辞学的雄弁に関して対立したスコラ学者でブルゴス司教のアロンソ・デ・デ・カルタヘーナ（1384-1456 年）は、カスティーリャ貴族を、貴族たち自身のため、また他身分からの明白な差別化のさらなる一手段として知的活動に親しむべきだと誘いつつも、貴族たちが使用すべき言語は「平易な俗語」であるべしと説いた。カルタヘーナは、俗語をラテン語より劣るものと見なし、ラテン語という聖なる領域から貴族を排除しようと試みた。ここからは、聖俗の言語にまつわる議論が、社会的身分をめぐる意識上の闘争だったことがわかる。

(4) 15 世紀を特徴づける現象に、読み書きに携わる者たちのプロソポグラフィの変化がある。中世後期には、書籍の所有や読み書きの習慣が、聖職者や学者のみならず俗語使用者の間にも普及し始め、学者および聖職者が占有していた学問や文芸に、より広い層の人びとが親しむようになった。この層の中で、宮廷文化の中で教養を高めつつあった貴族と並んで重要なのが、公証人・書記官・法律家・秘書・蔵書管理係などの、職務上の必要から読み書き能力を身につけた人びとである。彼らは、人文主義やルネサンス的潮流の浸透に伴ってカスティーリャ語において受容され定着した修辞学技法のうち、*ars dictaminis*（書簡術）および *ars notaria*（公文書術）から出発し、自由な内容の人文主義的親愛書簡などを俗語で認めるに至った。

同時に、これら俗語の書き手は、ラテン語使用者や韻律崇拝論者たちへの反論を開始する。フェルナンド・デ・ラ・トーレ（1416*ca.*-75 年）は『20 の書簡および質問の書』（1455*ca.*）において、自分に先立つ俗語散文の書き手たちの洗練ぶりを讃え、「ただラテン語ができないというだけで、多大な勤勉、時間と不断の努力をもって自らを高め、俗語に訳されたラテン語を読んだり、道徳ばかりか神学にさえ関係する事どもを、きちんと優雅に自分で書くこともできる人たちがいる」と、カスティーリャ語の洗練化が継承されている様を述べた。デ・ラ・トーレの作品に特徴的なのは、「装われた謙遜」という修辞学的トポスを取り入れ、ラテン語の書き手たちから示される侮蔑を諧謔をもって受け止め、読み書きにおける愉悦を存分に表現していることである。これは他の散文作家にも共通する精神であり、ルネサンス期の宮廷人に求められた *vir doctus et facetus*（教養深く愉快な人）の理想がカスティーリャにおいて定着していたことを示している。

このような精神は、15 世紀末の F. デ・プルガール『書簡集』でさらなる展開を見せる。平民で王室書記局官吏だったプルガールは、サンティリャーナ候などの先達の含蓄と機知を「真実に塩を与える冗談」と呼んで称揚すると同時に、これらが古典古代の作家たちから受容したものであることを明らかに示

した。また、「別の人生を送ることを、仮にブルゴーニュ公領を与えられるとしても、私は望んだりしません。私が身につけたいのは、何人たりとも私から剥奪できないような地位と名誉だからでございます。また、どんな地位も、本来の徳を持ち合わせない者に徳を与えることなどないと、私は信じているからでございます」と、自らの身分と職業に対する強い自負と矜持を繊細に表現してみせた。

(5) プルガールの作品については、特に『書簡集』および『カトリック両王年代記』の相互テクスト性を検証する予定であった。

両作品の写本調査や両作品に関する書誌学的先行研究の網羅的精査を通じ、両作品の執筆・刊行過程を考察した。2011 年 2 月 28 日～3 月 16 日には、スペイン国立図書館、スペイン王立歴史アカデミー、スペイン高等学術研究所、メネンデス・ペラーヨ図書館（スペイン）において調査を行った。この成果として、『カトリック両王年代記』の書誌学的先行研究をまとめ、その問題点を指摘した論文をまとめたが、発表の機会を得ていない。

また、『書簡集』に収められた書簡受取人と『カトリック両王年代記』の登場人物（特に「演説」の発話者）が重複していることに着目し、両作品の相互テクスト性について、執筆時期に基づく時系列的分析を行う予定であった。相互性のある書簡と演説の抽出、および、『書簡集』の書簡受取人および書簡作成時期に関する一覧を作成するところまで作業を進めることができた。『カトリック両王年代記』については、演説およびこれらの執筆時期のリストアップを途中まで進めることができた。これを今後進め、2 作品の相互テクスト性分析を完了させたい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

①瀧本佳容子、カスティーリャ語の権威化－15 世紀のカスティーリャ文学をめぐる試論－、慶應義塾大学日吉紀要 言語・文化・コミュニケーション、査読無、44 巻、2012、19－34

②瀧本佳容子、初期ルネサンス期のカスティーリャ語文芸－世俗化と普遍への志向－、慶應義塾大学日吉紀要 人文科学、査読無、28 巻、2013、73－94

〔学会発表〕（計１件）

①瀧本佳容子、La autoridad de la letra -15 世紀のカスティーリャ語散文における「作者」の誕生（１）-、第 147 回東京スペイン語文学研究会、2011 年 1 月 22 日、東京大学駒場キャンパス

６．研究組織

(1)研究代表者

瀧本　佳容子（TAKIMOTO　KAYOKO）

慶應義塾大学・商学部・准教授

研究者番号：７０３０６８６９

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし